茨木市将軍山古墳出土埴輪の割付技法と製作痕跡

村瀬　陸

１．はじめに

本稿は、茨木市将軍山古墳出土埴輪の割付技法と製作痕跡について、観察所見をもとに再評価することを目的とする。

２．既往の認識

（１）既往の位置づけ

将軍山古墳は、1950 ～ 60 年代にかけて調査され、現在は宅地化し消滅した。墳丘の広範囲で発掘調査が行われ、墳丘構造･竪穴式石槨の副葬品･埴輪といった築造時期を判断するための情報が得られた。これらは、長らく未報告の状態であったが、墳丘と埴輪については詳細が公表された（茨木市 2005・2008）。

年代的な評価については、近接する紫金山古墳との関係を考慮して進められており、『前方後円墳集成』では紫金山古墳を２期、将軍山古墳を３期に位置づけている（近藤 1992）。副葬品編年を重視した大賀編年ではいずれも前Ⅴ期に位置づけられている（大賀 2002）。

今回着目する埴輪での位置づけは、廣瀬覚・若杉智宏によりⅠ期でも新しい時期と評価された（茨木市 2005）。鐘方正樹は、将軍山古墳出土埴輪が割付１式、紫金山古墳出土埴輪が割付２式であることから、将軍山古墳が紫金山古墳に先行すると評価した（鐘方 2007）。

（２）埴輪の特徴と評価

将軍山古墳出土円筒埴輪は、全形が把握できる資料がないものの､底部高約４㎝､２段目約 14 ㎝、３段目以上が約 18 ㎝となり、口縁部高が約６～９㎝である個体が出土している（茨木市 2005）。非常に規格性があり、低位置に１条目突帯を貼り付けることが特徴である。また、円筒埴輪の外面には設定工具痕跡が多数確認され、規格化の方法を検討する上での情報も多い。ほかに特殊器台形埴輪が少量と壺形埴輪も出土しているが、これらは墳頂部で限定的に配列された可能性が高いとされる。

円筒埴輪の割付技法については、若杉智宏の検討がある（若杉 2005）。若杉は、１段目（約４㎝）＋２段目（約 14 ㎝）＝３段目以上の突帯間隔(約 18 ㎝）となることに着目し、２条目突帯を割付した後に１条目突帯を割り付けたとした。このことは、１条目突帯に切られる突帯設定工具の痕跡があることや、２つの設定工具痕跡が近接して底面付近に残存している例があることを根拠とした。

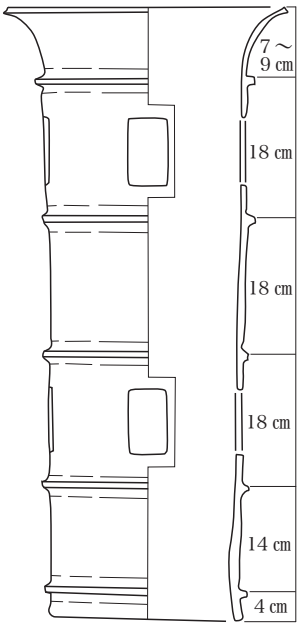


図１　将軍山古墳出土円筒埴輪の規格

鐘方正樹はこれを追認して割付１式として評価した上で、低位置に突帯を貼り付けたのは器台の脚部を痕跡器官的に表現しようとしたものと推定した（鐘方 2007）。

３．観察所見

2023 年７月９日に将軍山古墳出土埴輪を観察する機会を得た。報告書で提示された設定工具痕跡を確認するための調査であったが、以下の通り報告書で触れられていなかった所見をいくつか得ることができた。ここでは、報告書に記載のない部分を中心に報告する。

（１）割付技法にかんする所見

まず、既往の認識をもとに設定工具の視点にたつと、２条目突帯および３条目以上の突帯は約 18 ㎝で割り付けられる工具を用いて同様に設定されたと考えてよい。問題は、約 18 ㎝で割り付けられる工具にもうひとつ刺突工具があって底部高の約４㎝を設定したのか、別工具で設定したのかである。

若杉智宏は、報告書のなかで底面付近に近接して認められる棒状圧痕があり、ひとつが１条目、もう一方が２条目突帯を設定するための工具痕跡

であると評価した（若杉 2005）。そこで、若杉がこのように評価した根拠となる報告番号 21 の個体を再度観察したところ、確かに底面付近に近接してふたつの棒状圧痕が認められるものの、すぐ上方の１条目突帯剥離部分に認められる方形刺突とは微妙に軸がずれていることを確認した。近畿地方の方形刺突が認められる個体では、その間隔が不均等である場合があり、底面の痕跡が近接していても、どちらも２条目突帯に起因するものである可能性がある。これを追認する根拠として、１条目の突帯が剥離した面に刺突が確認できる個体（報告番号３・７・11・15・25・33・35）のうち、ひとつもその下方に棒状圧痕は認められなかった。つまり、底面に認められる棒状圧痕はいずれも２条目突帯を設定する際についたものである可能性が高い。また、１条目突帯が剥離しておらず底面付近に棒状圧痕がみられ２段目には認められない場合、１条目突帯設定時の工具痕跡のように思えるが、報告番号 21 のように、むしろ２段目には圧痕が残らない場合のほうが多い。

これを前提とすると、１条目突帯の割付方法には２つの可能性が生じる。ひとつは突帯間隔を設定する工具とは別に底部高を設定する工具がある場合、もうひとつは突帯間隔を設定する工具に着脱式の刺突工具がある場合（註１）である。結果から述べると前者が妥当であり、根拠となるのは報告番号７・11 の個体である。これらはいずれも１条目突帯が剥離しており、なおかつ棒状圧痕

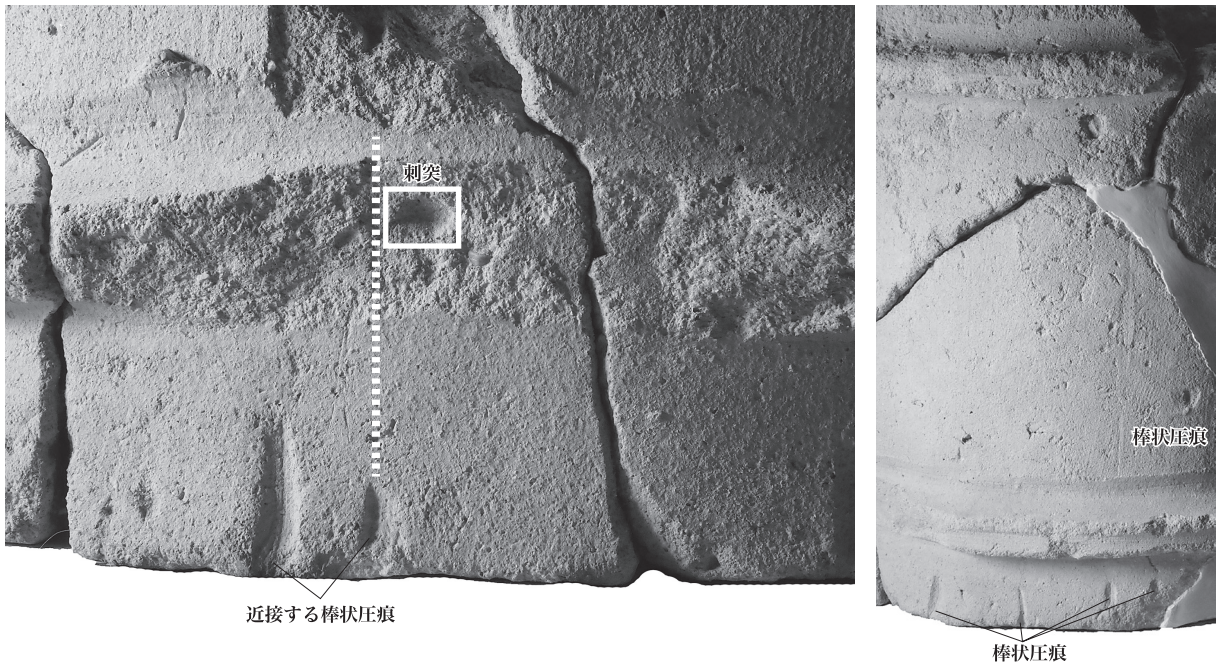


図２　報告番号 21 の工具痕跡

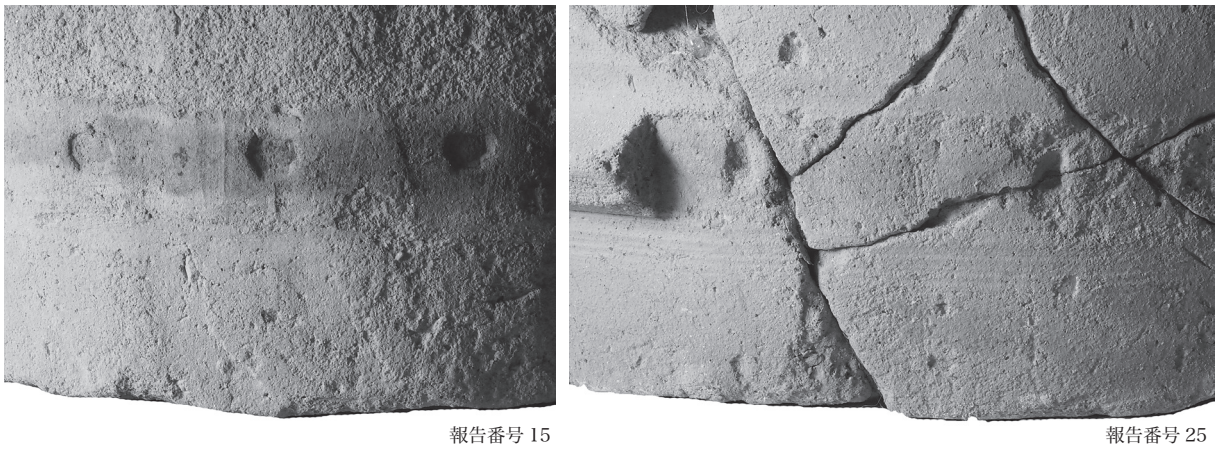
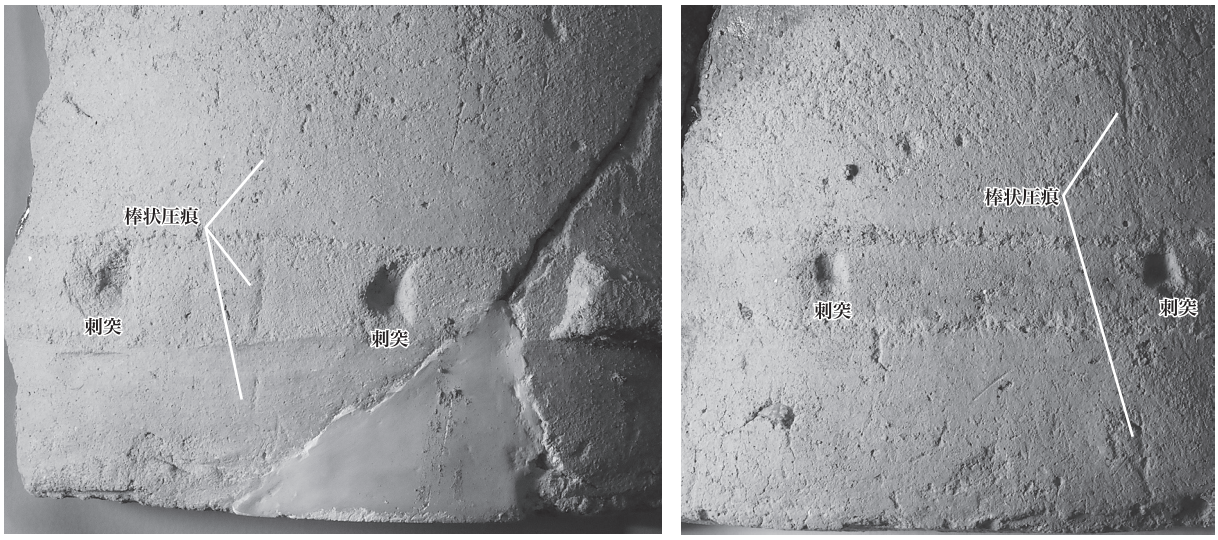
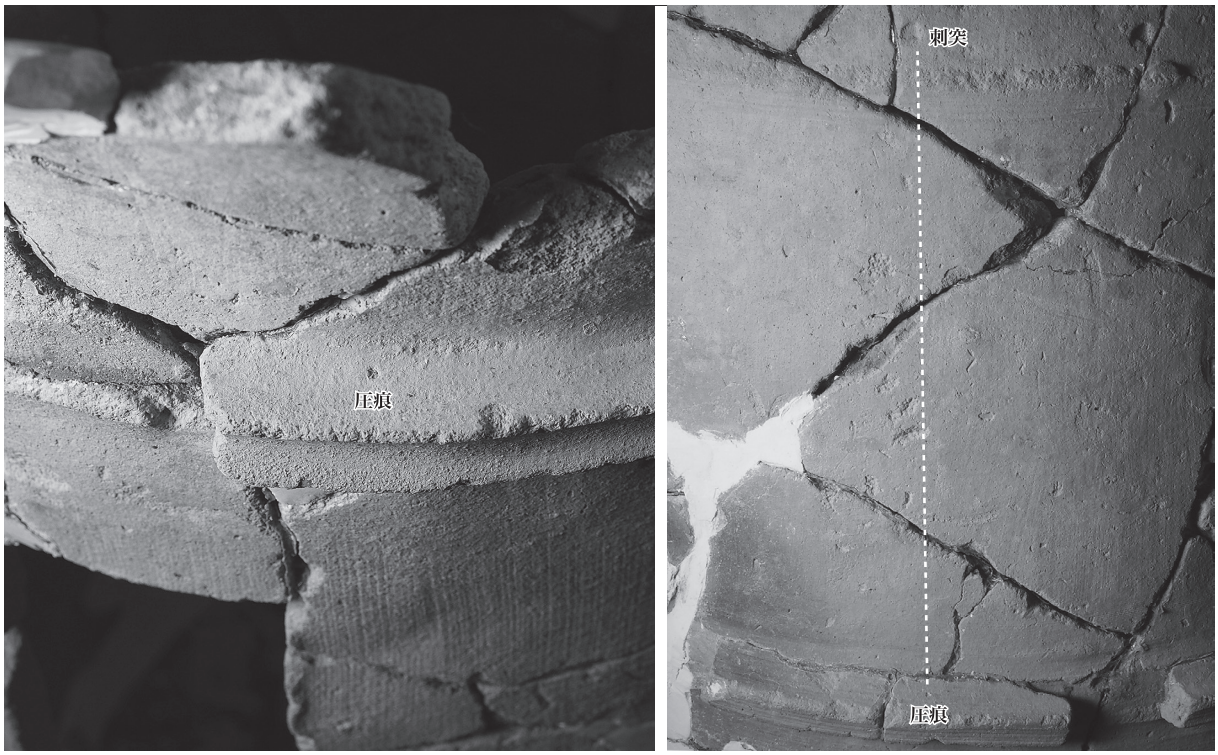


図３　１条目突帯下の刺突とその下部の無痕跡

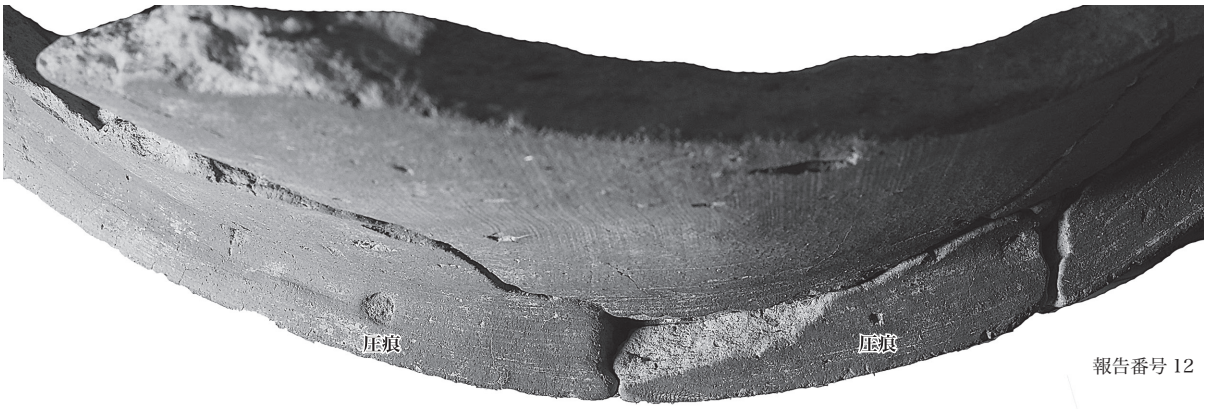


報告番号７　　報告番号 11

図４　１・２段目にみえる棒状圧痕



報告番号１　　報告番号 10



報告番号 12

図５　突帯上辺にみられる圧痕

が１段目だけでなく２段目まで及んでいる。仮に後者の想定が妥当である場合、棒状圧痕の軸上に１条目の刺突が認められるはずであるが、すべての圧痕に対して刺突は軸上に認められない。その上で１条目にも方形刺突が認められ、底部高約４㎝で揃っていることから設定工具を用いていることは間違いなく、２条目以上を約 18 ㎝で割付する工具とは別に、底部高を設定する工具が存在したと証明できる（註２）。

これらの棒状圧痕は、報告書でも着目されているが、図に表現されていない個体（報告番号８・11・15・16・23・37）でも今回新たに確認することができた（註３）。

次に、口縁部の割付についてであるが、報告書では具体的に触れられていないが、鐘方正樹はばらつきがあることから規格化されていないと評価した（鐘方 2007）。報告された口縁部高のわかる個体は３点であり、筆者の計測では報告番号１が９㎝、９が７㎝、18 が８㎝であった。このうち、報告番号１の口縁部下方の突帯上辺に、比較的小さいものの圧痕を複数確認することができた。突帯上辺には、上方の突帯を設定する際に工具を置いた圧痕が認められる場合があり（辻川 2003）、報告書でも報告番号 12 で突帯間隔を設定する際の工具を置いた圧痕が確認されている。なお、この痕跡についても報告書には記載がないが報告番号 10・20 に同様の痕跡が認められることを確認した（註４）。とくに 10 では上方突帯の剥離面に認められる方形刺突との対応関係が確認でき、報告番号１にみるような小さな圧痕でも工具痕跡として評価できることを証明する。このことから、報告番号１にみる痕跡が口縁部高を割付するための工具痕跡である可能性があり、規格化されたものと評価しうる余地がある。この点については資料数が少ないため断定できないが、類例として五色塚古墳出土埴輪があり、全体としてみると口縁部高に変動があるが、細別集団ごとにまとまりがあり、今回確認したような突帯上辺の痕跡から規格化している事例がある。

（２）製作痕跡にかんする所見

割付技法にかんする所見に注視して観察を行うなかで、製作痕跡にかんする所見を得ることができた。そのなかでも特筆できるのが、報告番号 23 の底面付近に認められる斜め方向の圧痕である。報告書では指摘されていないものであるが、棒状圧痕とは明らかに方向等が異なるものであり、一見すると土器にみられるタタキ成形の痕跡に類似する。これがタタキ成形の痕跡であるとした場合、円筒形にした状態で底面付近を叩くのは非常に困難なように思える。

そこで考えられるのが、粘土板を成形するとき

図６　底部にみられるタタキ状圧痕（報告番号 23）

の痕跡としてみる場合である。円筒埴輪の底部は、一定幅の粘土板を用いて基部をなし、そこから粘土紐を積み上げる工程が実証されている（川西 1978・廣瀬 2013）。粘土板を用いた基部成形はⅠ・Ⅱ群埴輪でとくに顕著であることが廣瀬覚により証明されており、なかには粘土板を伸ばす時の掌や指の圧痕や、木製作業台に伴う木目状圧痕が認められるとされる（廣瀬 2013）。

ただし、今回確認した圧痕は木目状ではなく明らかにタタキ成形に近い痕跡であり、粘土板を伸ばす際にタタキ工具で叩いたような方法が想定されるものである。同様の痕跡はメスリ山古墳にも認められる。必ずしもこの想定が正しいかはなお検証が必要であるが、製作痕跡として重要なものと考えられる。

また、報告番号５の底部内面には、部分的に横方向のケズリ調整を確認した。基本的にはナデ・指オサエが顕著であるが、自重で潰れてしまった部分などを簡単に手直しした痕跡とみられる。

５．おわりに

以上の通り、報告書で記載のなかった設定工具痕跡を中心に観察所見を提示した。なかでも、約４㎝の底部高設定工具、約 18 ㎝の突帯間隔設定工具、そして変動的ながらも口縁部高を設定する工具がそれぞれ存在する可能性を指摘した。このような割付１式系統で工具を使い分ける事例は五色塚古墳でも確認でき、割付系統と工具の使用方法を検討する上でも重要な所見である。

謝辞

資料調査では、茨木市立文化財資料館の清水邦彦氏にご対応いただき、本稿執筆のお誘いをいただいた。記してお礼申し上げます。また、本稿は高梨学術奨励基金令和５年度若手研究助成の研究成果を含む。

註

１）鐘方正樹が先駆的に想定しており（鐘方 2003）、筆者は富雄丸山古墳出土埴輪の外面に認められる痕跡から実証した（村瀬編 2022）。

２）約 18 ㎝の工具に刺突工具がある場合、突帯間隔を設定する際にも約４㎝付近に意図せぬ工具痕跡があってもよいが、そういった痕跡は当然認められなかった。

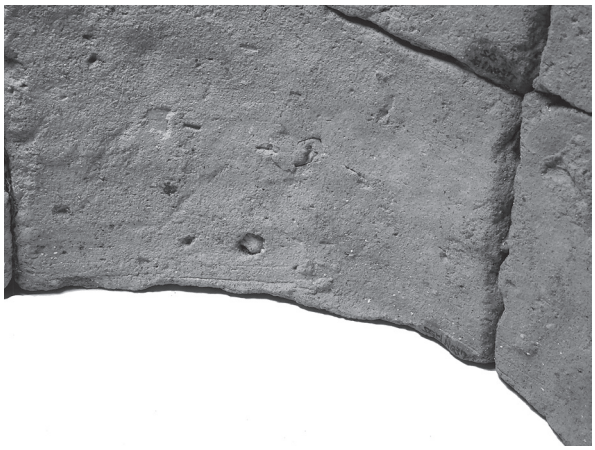


図７　底部内面のケズリ調整（報告番号５）

３）もともと図で表現されていた個体でも、図化されている以上に複数の棒状圧痕が認められた。

４）報告番号 20 では、突帯上辺の圧痕の軸上で棒状圧痕も観察できる。

図版出典

図１～７：筆者作成・撮影

引用文献

茨木市 2005『将軍山古墳群Ⅰ－考古学資料調査報告集１－』

茨木市 2008『将軍山古墳群Ⅱ－考古学資料調査報告集２－』

大賀克彦 2002「凡例　古墳時代の時期区分」『小羽山古墳群』福井県清水町教育委員会　pp. 1-20

鐘方正樹 2003「古墳時代前期における円筒埴輪の研究動向と編年」『埴輪論叢』４　埴輪検討会　pp. 1-38

鐘方正樹 2007「茨木市将軍山古墳・紫金山古墳の円筒埴輪」『埴輪論叢』６　埴輪検討会　pp. 1-14

近藤義郎編 1992『前方後円墳集成　近畿編』山川出版社

辻川哲朗 2003「突帯－突帯間隔設定技法を中心として－」『埴輪－円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析－』埋蔵文化財研究会　pp. 3-30

廣瀬覚 2013「製作技術からみた埴輪様式の成立と展開」『立命館大学考古学論集』Ⅵ 同刊行会　pp. 231-240

村瀬陸編 2022『富雄丸山古墳発掘調査報告書１』奈良市教育委員会

若杉智宏 2005「考察－将軍山古墳出土埴輪の系譜と意義－」『将軍山古墳群Ⅰ－考古学資料調査報告集１－』茨木市　pp. 30-38